

令和元年度学校評価表

青翔開智中学校・高等学校

建学の精神からなる本校の中長期目標	今年度の重点目標
<p>「探究」複雑な課題を高い創造力によって解決する取り組みを「探究」と定義し「探究できる人材」の育成を推進する。さらに文科省SSH校(指定期間H30～H35)として探究カリキュラムの開発を進めるとともに本校の探究活動を県内外へ発信・普及させる。</p> <p>「共成」共に成長する力を育成する教育をグローバル・ダイバーシティ教育と位置づける。グローバル・ダイバーシティ教育では多様性の理解を進め、英語を道具として場所や相手を選ばずに成長できる人材の育成を進める。</p> <p>「飛躍」自分とは何かを問い続け、好きなこと・得意なこと・社会が求めること・価値観を追求することにより、進路をデザインし実現する。</p> <p>さらに、探究活動を支えるICT及び図書環境を充実させ探究を後押しするとともに、生徒と教職員が主役となり、保護者からの協力が絶えない学校創りを目指す。</p>	<p>1、 通常授業における図書館利用学習のさらなる推進と探究のルーブリック評価の開発。</p> <p>2、 多様性理解に向けた行事の実行と英語力向上のための授業開発。</p> <p>3、 海外大学への興味関心の向上と理解促進。偏差値に偏らない進路デザインとその実現。</p> <p>4、 上記を円滑かつ効果的に推進するためICTおよび図書環境の充実と支援の体系化。</p> <p>5、 生徒と教職員のやりたいことを重視した学校運営。保護者の行事参加率の一層の向上。</p>

年度当初			評価結果(年度末)			
評価項目	具体的目標	具体的方策	評価基準	評価	自己評価および次年度の主な課題	
重点目標1に対応	「探究」 探究学習・SSH	A. 探究学習を評価するルーブリックの開発 B. 探究の成果向上のためのスキルを身につける	A. 探究ルーブリック完成の有無を評価基準とする。 B. 各教員の図書館ルーブリックを用いた図書館利用学習の実施率を評価とし全員教員実施を目指す。	A. 評価B B. 評価B	A. 高校のルーブリックは作成完了。中学校については作成途中で今年度終了した。来年度は中学校のルーブリック完成と、高校のルーブリック運用を目指す。 B. 常勤教員27名のうちルーブリックを用いた図書館利用学習を実施した教員は17名。実施率63%のため評価Bとした。来年度は実施率80%を目標とし評価Aを目指す。	
重点目標2に対応	「共成」 グローバル・ダイバーシティ教育	A. 英語や多様性に対する苦手意識を取り払いグローバルに向かう姿勢を整える。 B. 英語4技能の育成を推進し英語をツールとして活用できる人材を育成する。 C. 多様性とは何かを自分の考えで意見できる人材を育成する。	A. 英語イベントの実施や海外留学生の受け入れを積極的におこない、海外と生徒の接点を多くもつ機会を作る。昨年度を上回るため特に中学1・2年生のイベントを開発する。 B. 外部英語試験を推奨し、試験合格に向けて具体的な対策講座を学内で開講する。特に中3以上の取得率の向上を目指す。 C. 各学年にて多様性の理解を促進する行事を企画し実行する。高校生については外部入学も考慮しながら行事を計画する。	A. 行事への生徒の年間参加率と満足度を評価基準とする。 B. 各学年で目標級を決め、その合格率を評価基準とする。 C. 各学年にて行事の実施状況を評価基準とする。	A. 評価A B. 評価B C. 評価B	A. 中学1年・2年の全生徒を対象とした出張英語村(公立鳥取環境大学)を実施した。満足度は中学1年(4.17)、中学2年(3.90)となり総合的に判断し評価Aとした。 B. 中1英検4級以上(72.7%)、中2英検3級以上(87.2%)、中3英検準2級以上(61.9%)。高1CEFR A2以上(96.0%)、高2CEFR B1以上(50%)、高3CEFR B1以上(57.5%)。昨年度より全体的に向上がみられるが総合的に判断し評価Bとした。 C. 実施回数は中1(3回)、中2(4回)、中3(2回)。高1(1回)(高1生の3分の1が参加)、高2(0回)(企画したが参加者との都合が合わず未実施)、高3(0回)。全校生徒の5分の1が参加したポッチャ大会の開催など、昨年度以上にイベント実施ができたが、高校生の実施・参加状況が低いため、総合的に判断し評価Bとした。
重点目標3に対応	「飛躍」 キャリア教育	A. やりたいことから目標を設定し実行できる人材の育成。 B. 国内大学だけでなく海外大学進学への興味関心を向上させる C. 探究活動やグローバル教育をとおし、将来のビジョンを明確にした進路を考える生徒を育成する。 D. 選択した進路を実現する。	A. やりたいことを目標設定し実行する仕組みに対して、フィードバックを得る機会の構築。 B. 海外大学に関する行事を多数企画し生徒たちの参加を募る。 C. 探究部と進路部が連携し、探究学習の結果を活用した個別の進路指導をおこなう。 D. 予備校などの外部講師とも連携し進学のための学力向上を目指す。	A. やりたいことを基準に作成した目標のフィードバックを得る機会をもてたかどうかを評価とする。 B. 生徒の参加率と参加生徒の海外大学への進学希望度アンケート結果を評価基準とする。海外進学希望者数の割合が中学生5%、高校生10%を目指す。 C. 卒業時の進学アンケートにおける卒業生及び保護者の進路満足度を評価基準とする。 D. 卒業時の進学アンケートにおける卒業生及び保護者の進路実現度を評価基準とする。	A. 評価B B. 評価A C. 評価A D. 評価A	A. 高校2年生3年生は探究などの情報をもとに教員とディスカッションできるシートをクラウド上に作成し、進路支援に大きく役立てることができた。その他の学年は年間の目標設定程度に終わったので来年度はフィードバックする仕組みの構築をおこなう。 B. 各学年の海外進学希望者割合は中学1年(6%)、中学2年(0%)、中学3年(6%)、高校1年(4%)、高校2年(14%)、高校3年(10%)であり、高校3年の進学希望4名はそれぞれ海外への進学を達成した。学年により差はあるものの、全体としては海外にも視野を広げている結果となった。 C. 5点満点の評価アンケートの結果、卒業生満足度(4.19)、保護者満足度(4.56)となり総合的に判断し評価Aとした。来年度からは高校3年生以外の学年について進路を考える機会の体系化をおこなう。 D. 5点満点の評価アンケートの結果、卒業生実現度(4.56)、保護者満足度(4.50)となり総合的に判断し評価Aとした。来年度からは進路実現を目指す、6年間をとおして自律した学習者を育てるための指標を作成することを目標とする。
重点目標4に対応	ICT・図書環境	A. ICT機器の高度な利活用を全校生徒が実践できる環境作り。 B. 各授業における先進的なICT活用の実践。 C. 探究活動やSSH事業を支援する学校図書館の整備	A. 教員とICT委員会が中心となりICT機器利用のガイドブックなどを作成し共有を図る。 B. 各教員の取組みのガイドブックを作成し共有する。 C. 自然科学分野、総記(情報科学)、英語多読に関連する資料を拡充する。	A. ガイドブックの作成進捗度を評価基準とする。 B. ガイドブックの作成進捗度を評価基準とする。 C. 資料の導入実績を評価基準とする。	A. 評価B B. 評価C C. 評価A	A. ICT機器の一つであるマイクロビットの使い方をクラウド上に作成し全校生徒と共有できる仕組みを構築した。来年度は機器だけでなく探究に必要なツールの使用方法も作成する。 B. 本校は小規模校のため職員会議などで口頭で共有可能である。次年度は目標を見直し、ICTを使った図書館利用活動の情報共有に改める。 C. 全体の蔵書数に対する自然科学分野の蔵書数率は8.3%→10.4%に向上し、冊数も480冊増となった。総記は3.9%→4.0%、言語は3.8%→3.7%となり蔵書数率に変化はなかったが冊数はそれぞれ増加した。導入実績は総合的に判断しA評価とする。来年度は購入した本を活用し図書館スキルラーニングを実施することを目標とする。
重点目標5に対応	学校創造	A. やりたいことを行うための最低限のルールに見える化と共有 B. FTAのワーキンググループ活動の活発化	A. 建学の精神や生徒会ルールなどが見える化し学内掲示や学校HPなどで共有する。共有情報の理解度を測るための調査を実施する。 B. FTAから参加の呼びかけを行い活動への参加者増を狙う。総会や懇親会を除くワーキング活動への参加増を目指す。	A. 全校生徒のルール理解度を評価基準とする。 B. 各家庭からワーキング活動へ年間2回の参加を目指す。	A. 評価C B. 評価B	A. 学校HPをリニューアルし、建学の精神の公開をおこなったが、生徒への理解度向上までは至っていない。来年度は理解度を向上するような情報共有会を全校で実施する。 B. 行事に2回以上参加した家庭の割合は中学校が65%、高校が47%となり中学校は参加率が向上したが高校は若干低下した。コロナウイルスによる行事の中止などもあったため、総合的に判断し前回同様のB評価とした。学年が上がるにつれ参加率が低下するため、来年度は上級学年向けのイベントなどを計画する。

評価基準 = A:ほぼ達成(8割以上) B:概ね達成(6割以上) C:変化の兆し(4割以上) D:不十分(4割未満)